２つの『おおきな木』論

～「受容化」と「異質化」の翻訳姿勢から見えるメッセージ～

２０２０年１１月２１日

３年９組　３２番

村口　巧真

【優秀論文】

２つの『おおきな木』論

～「受容化」と「異質化」の翻訳姿勢から見えるメッセージ

3 年 9 組 32 番　村口　巧真

Ⅰはじめに（アブストラクト）

『おおきな木』は、1964 年にアメリカで出版された、シェル・シルヴァスタイン作の絵本である。原題は『The Giving Tree』で、HarperCollins Publishers より出版された。そして、1976 年に初めて本田錦一郎によって日本語に翻訳された。その後、本田の篠崎書林版が絶版となり、あすなろ書房から村上春樹訳が出版されたことで注目を集めた。また、1990 年から 2001 年にかけて中学 3 年用の英語教科書『New Horizon』にも掲載されたため、この作品の教育における効果や、認知度は高いと言ってもよいだろう。

本稿では、『おおきな木』について以下の手順に沿って論考していきたい。第一に、『おおきな木』のあらすじと、「受容化」と「異質化」の翻訳姿勢について述べる（Ⅱ）。次に、二章で述べた翻訳姿勢を元に、本田錦一郎、村上春樹それぞれの翻訳を通した読者に対するメッセージを分析する（Ⅲ、Ⅳ）。最後に、両者のメッセージを比較検討し、互いの作品に内在する共通の価値について考察していきたい（Ⅴ）。

Ⅱ　「受容化」、「異質化」の概念と『おおきな木』

はじめに、『The Giving Tree』のあらすじを紹介する。登場人物は木と少年の 2 人のみだ。はじめ、2 人はとても仲が良くいつも遊んでいた。だが、少年が成長するにつれ、木が 1 人きりになる時間が増え始める。そして、少年は何か欲しいものがあるときだけ木の元へ

現れるようになる。その度に木は、自分の果実や枝などを与え、最終的には幹をも与え切り株になってしまう。最後には、老人になった少年が木の前に現れて休む場所を望むと、木は自分に腰掛けるように勧めた。木は生涯を通して、少年のために自己犠牲をして与え続け、いつも幸せであったのだ。

本田、村上いずれの『おおきな木』も原作とストーリーはほぼ同じだが、センテンスにやや違いがある。英米児童文学研究者の藤本は翻訳の難しさについて次のように述べている。

> よその国で出された絵本は、もともと内容が自然・風土から文化・習慣、また細々した衣食住にいたるまで違うわけですから、日本で出版する際は、横文字を日本語に直すだけでは日本の読者、特に子どもの読者にはわかりにくいことがあります。さらに、小説などと違って、絵本には絵がありますから、時には文章で語っていることをすでに絵が示している場合、逆に文章に書いていないことを絵で示している場合もあり、さまざまな工夫をして、言葉を移し変えなければならない。[1]

外国語で書かれた文学作品を日本語に翻訳する際には、ただ言葉の意味だけを言い換えるだけでは不完全であり、読者には理解しにくい場合がある。なぜなら、言葉の持つ意味とはその国の社会的・文化的な生活形態のあり方を背景にして定められるからだ[2]。

---

[1] 藤本朝巳(2007)『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部、p.12

[2] 古市久子, 西崎有多子(2009)『東邦学誌』第 38 巻第 1 号所収、愛知東邦大学　p.43

このとき、翻訳における理論、概念のうち主要なものの一つとして考えられる、現代の翻訳研究者ヴェヌティが論ずる「受容化」と「異質化[3]」という翻訳姿勢が重要な役割を持つ。

「受容化」とは、読者にとっての読みやすさが重視されるため、原作の持つ英米の文化や社会的な考え方は排除され、その作品があたかも最初から日本語で書かれたようにふるまう。そのため、翻訳者の存在が意識されにくい。それに対して「異質化」は、原作の持つ文化や社会的慣習や日本語との間に生ずる言語学的差をそのままの形で翻訳し、滑らかではない異質性を持った翻訳を目指すため、翻訳者の存在が強く出る。[4]

翻訳を行う際に翻訳者の中で最も大きな問題となるのは、原作からどこまで離れて、読者寄りの翻訳になっていいかという点である。テクストを完全に自国風に「受容化」させるのか、それとも「異質化」のまま、外国的な部分を残すのかは、翻訳者の原作へのリスペクトや外国文化に対する態度が影響する。日本人翻訳家の小倉は、読者の原作の背景にある異国文化などに対する知識が少ないと翻訳者が意識すると、「受容化」の割合が大きくなり、翻訳者の原作への敬意が大きくなると「異質化」の割合が大きくなると説明した[5]。

『おおきな木』が出版される以前に、『プー横丁にたった家』や『熊のプーさん』などを翻訳し、日本に翻訳文学の魅力を伝えた石井桃子は、代表作の『熊のプーさん』を初めとして数々の作品を翻訳し、また、一つの作品についても複数回改訳を繰り返してきた。その際

---

[3] Venuti, Lawrence(1995)『The Translator's Invisibility:A History of Translation』London: Routledge.　p.15
[4] 同上
[5] 小倉慶郎(2008)『言語と文化』第 7 巻所収、大阪府立大学総合教育研究機構 p.61

に彼女の翻訳に対する考え方や姿勢も変わっていったように見受けられる。彼女は初め、読者である児童の読みについてだけを考え翻訳をしていた。しかし、改訳を繰り返すうちに、「『この作品で作者は何を表現したいのか』という作者寄りの視点も加味するように変化していった」[6]とあるように原作へのリスペクトを持って「異質化」の姿勢を見せるようになったのだ。この「受容化」、「異質化」の観点をもとに、本田と村上の表現にはそれぞれどのような違いがあり、表現の差からそれぞれの翻訳姿勢はどのようなものかを分析する。

Ⅲ　本田錦一郎の『おおきな木』を通したメッセージ

(1) 本田の翻訳の意図

物語の内容について比較する前に、まずは文体などの形式について見ていく。地の文は全て常体、会話部分は口語で表記されている。また、木や子、男などの簡単なものでも漢字は一切使わず、全てひらがな表記となっている。これらのことから、本田は小さい子供でも理解できるよう工夫していることが伺える。そして、常体にあえてすることでリズム感を生み出し、読み聞かせにも適したものにもなっている。今井、坊井は、幼児に読み聞かせをすることで幼児は登場人物との同一視をし、心情理解が促進されると結論づけた[7]。本田は絵本の特性を活かして目と耳から物語を感じ、子供でも容易に理解できるようにこの形式にしたと考えられる。

次に、具体的に内容の比較をしていく。代表的な違いとして、①木が少年に自分のりんご

---

[6] 竹内美紀(2014)『石井桃子の翻訳はなぜ子どもをひきつけるのか―「声を訳す」文体の秘密―』ミネルヴァ書房 p.163

[7] 今井 靖親, 坊井 純子(1994)『奈良教育大学紀要　人文・社会科学』第 43 巻第 1 号所収、奈良教育大学　pp.241-242

や枝をあげる際に毎回言う言葉、②与えられるものがなくなったときの木の言葉、③少年が久しぶりに木の前に現れた時のオノマトペ、の 3 点の表現を原作と比べる。①原作では、木が少年にりんごなどを与える際に木から少年へ”you will be happy[8]”と伝える。これは、少年の要求が幹などの大きなものになっても変わらずに伝えられる。それに対して本田の翻訳では、りんごを求められた際には「たのしくやれるよ。」、枝を求められた際には「たのしくやれるでしょう。」、そして幹を求められた際には「たのしくやっておくれ。」と表現に変化をつけている。この変化をつけたことの意図として、木の心情を伝えるということが考えられる。今まで仲良く遊んでいた少年が自分以外の誰かと遊び、今はそこに自分は含まれていないことへの寂しさや諦めがこの表現から読み取れる。②原作では与えるものがなくなった時に”I'm sorry”と少年に伝える。これを本田は「すまないねえ」と翻訳している。

これは「かわいそうに」と翻訳した村上と比べるとより木の心情に寄り添っていると読み取れる。前後の発言を踏まえると、年老いて何もできなくなってしまった少年がかわいそうとも読むことはできるが、本田の翻訳の方がより木の心情を捉えやすい表現になっている。

つまり本田は、子供でも理解のしやすい工夫を施し、木の心情になぞった翻訳をしていると言える。

③原作では、少年が久しぶりに木の前に現れた際、”the boy came back”としているが、これを本田は「そのこがひょっこりもどってきたので」と翻訳した。この「ひょっこり」という表現から本田の想定する読者像が推測できる。本田は、読み聞かせを想定し、文字を覚えたての子どもたちに対して、読み聞かせを通して聴覚に訴えているのだ。これにより、子ど

[8] Shel Silverstein(1964)『The Giving Tree』HarperCollins　p.32

もの知的好奇心を刺激し、子どもの読みをより能動的にしている。

(2) 本田の翻訳のテーマ

(1)節では、本田の翻訳を通したメッセージを探るために内容の比較を行ってきたが、ここからは本田自身の言葉であるあとがきに着目していく。

本田はあとがきで、エーリッヒ・フロムの「愛とは第一に与えることであって、受けることではない[9]」という言葉を引用している。そしてそれに対して、「『与える』ことは人間の能力の最高の表現なのであり、『与える』という行為においてこそ、人は自分の生命の力や富の喜びを経験することになる[10]」、「もっとも重要かつ微妙な問題は、この『与える』という行為に、犠牲の行為を見てはならないという一点であろう[11]」と主張した。つまり、本田が翻訳という行為を通して読者に伝えたかったこととは、見返りを求めずに与え続けること、すなわち無償の愛であった。切り株になっても少年に与えることを忘れない木の愛情こそ、自己犠牲などではなく、真の無償の愛だと本田は言う。このことから、本田の翻訳のテーマは米国児童文学の根底にある無償の愛の文化を日本人読者にも理解してもらうことだと考えられる。

本田が今回行ったこととは内容の翻訳だけではない。”The Giving Tree”というタイトルを『おおきな木』と翻訳したのも本田なのだ。村上はあとがきで「長く読み続けられた本なので、混乱を避けるために『おおきな木』という元の題はそのまま使わせていただきました。

---

[9] エーリッヒ・フロム(1991)『愛するということ』紀伊國屋書店　p.43
[10] 本田錦一郎(1976)『おおきな木』篠崎書林　p.56
[11] 同上

[12]」と発言したため、このタイトルからも本田自身の考えを読み取ることができるだろう。

本来、原作のタイトルをそのまま翻訳すると、『与える木』となる。だが、本田がおおきな、と翻訳したのには、ここにも本田の想定する読者像が影響していると考えられる。子どもは読書をする際に、頭の中でイメージを膨らませながら読む。字が読めない分、絵に集中し、また耳から入ってくる読み聞かせの声に集中し、物語のイメージを膨らませるのだ。このことを考慮に入れた上でタイトルについて考えてみると、『与える木』よりも『おおきな木』の方がイメージを膨らませやすいと感じる。実際に、本書で木は見開き全体に大きく描かれ、木の上の部分は収まりきっていない。

また先程、子どもは字が読めない分絵や読み聞かせに集中すると指摘した。ここから、本田は「与える」というフレーズを敢えて避けたと考えられる。『与える木』というタイトルにすると、子どもは木が少年に与えるシーンだけに注目しうる。そして、無償の愛とは与えることなのだという理解をする可能性がある。だが、本田は木の心情になぞった翻訳姿勢をとっていたため、これは本田の意図と反する。本田がこのタイトルにした意図とは、この「与える」という行為ではなく、この行為の大本にある寛大な心を読者に気づき、理解してもらうことなのだ。

これらのことから、本田の『おおきな木』の翻訳姿勢は、「子どもがどのように読むのか」という子ども読者に対して多くの配慮をしたものだと考えられる。そして、本田は原作の根底にある無償の愛というテーマを日本人読者でも理解できるよう、心情にフォーカスを当てながら「受容化」したのだ。

---

[12] 村上春樹(2010)『おおきな木』あすなろ書房 p.55

すなわち、本田が翻訳を通して伝えたかったメッセージとは、日本人の子供でも理解しやすい工夫を施した受容的な翻訳で、見返りを求めない寛大な心や、相手のために与え続ける無償の愛を日本人にも共感してもらうことだと考えられる。

Ⅳ　村上春樹の『おおきな木』を通したメッセージ

(1) 村上春樹の表現から見える翻訳の意図

まずは、村上春樹訳と原作を具体的に比較していく。①主人公の呼称、②木が少年に自分のりんごや枝をあげる際に毎回言う言葉、③木の性別表現、④物語の転換点、の 4 点をそれぞれ原作と比べ、⑤の文末表現を本田訳と比べる。①主人公の呼称は、原作では主人公が老人になっても「the boy」で統一をしている。村上訳でも常に「少年」と表記している。②原作では先述したように、”you will be happy”と一貫した表現をしている。村上訳でも、「しあわせにおなりなさい[13]」と一貫したセリフを木が発している。③木の代名詞として「she」を用いたり、枝やりんごを「her branches」、「her apples」などと表記していることから、原作では木のことを女性的に捉えていることがわかる。村上訳でも「つくればいいわ[14]」や「おかねはないの[15]」などと全体的に上品な様子がうかがえるため、木を女性として捉えることができる。④この物語の転換点である、木が少年に自分の幹を与え、切り株だけになったことをきっかけに初めて木に悲しさや寂しさといった負の感情が芽生えた場面について考える。原作では”And the tree was happy… but not really.[16]”と表現している。これは直訳すると

[13] 村上　前掲書　p.34
[14] 同上
[15] 村上 前掲書　p.39
[16] ShelSilverstein 前掲書 pp.46-47

「それで木はしあわせでした、でも本当は違いました。」と訳せる。これに対して村上訳では、「それで木はしあわせに…なんてなれませんよね。[17]」と表現している。原作も村上訳も否定の形をとっている。

⑤の文末表現では、村上はですます調を使い、丁寧な表現にしている。木と少年が遊んでいる場面を例に取ると、本田は、「ちびっこは　きのみきに　よじのぼり[18]」や「えだに　ぶらさがり[19]」など次のページにつながるように翻訳し、テンポよくページをめくれるような工夫をしている。それに対して村上は、「木のぼりだってしました。[20]」、「えだにぶらさがってあそびました。[21]」など１ページ内で文を完結させている。本田に比べてページをめくるテンポは遅くなるが、その分１ページについて深く見ることができる。

また、少年が大人になってひさびさに木の前に現れるシーンでは、本田訳では次のように表現している。

> きはかなしかった。ところがあるひ　そのこがひょっこりもどってきたので　うれしさいっぱいからだをふるわせ　きはいった「さあぼうや　わたしのみきにおのぼりよ　わたしのえだに　ぶらさがり　たのしくすごして　おゆきよ　ぼうや。」[22]

これに対して村上訳では、次のように表現している。

---

[17] 村上　前掲書 pp.46-47
[18] 本田　前掲書 p.13
[19] 同上 p.15
[20] 村上　前掲書 p.13
[21] 同上 p.15
[22] 本田　前掲書 p.36

木はかなしくなりました。そんなある日、少年がまた木の下にやってきました。木はよろこびにからだをふるわせました。「おいで、ぼうや。わたしにおのぼりなさい。そしてえだにぶさがってあそんで、しあわせにおなりなさい。」[23]

本田はやはりテンポよく読めるように、接続詞を補って一文を長くすることで流れを切らないようにしている。それに対して村上は、「ました。」などを多く使って、丁寧に原作通りのところで文を区切っている。両者を比較してみると、接続詞を用いて文と文をつなげている本田訳の方が最後の木のセリフへのつながりが自然なように感じる。ここに、村上の「異質化」の姿勢が垣間見える。原作の形式を保ったことで、日本語にした際に不自然になっているのだ。

上記の①から④の比較から、村上はいわゆる直訳的な翻訳をしていると言えるだろう。このことから、村上春樹は原作の形式を残した翻訳することで、原作である『The Giving Tree』そのものの物語としての魅力を我々日本人に伝えようとしていたと考えられる。

すなわち、村上は原作の良さを伝えるため、あえて「異質化」の翻訳をしている。本田訳では一切使われていなかった漢字が村上訳では家や少年など、若干使用されていることも、大人を含めたより幅広い世代の日本人にこの物語の良さを伝えたかったためだと推測できる。

⑤からも、不自然さを抱える「異質化」の翻訳を通して、村上はこの物語の良さについて

[23] 村上　前掲書 p.36

時間をかけて理解し、読者自身の中できちんと意見を持って欲しいという意図が感じられる。

(2)『The Giving Tree』の魅力

先ほど、村上の翻訳の意図は原作そのものの魅力を読者に伝えることだと述べた。ではその村上が伝えたい魅力とはどのようなものなのだろうか。ここではその魅力について考えていく。

結論を先に言うと、この物語の魅力とは解釈の豊富さだ。先に述べた②のような主人公が子供の頃と老人になった頃でも一貫した表現を用いることがこの物語には多く見られる。これはつまり、同じセリフでも状況に応じて登場人物の心情を読者が考えるように仕向けているのだ。これにより幅広い読みが生まれる。村上はあとがきで次のように述べている。

> あなたがこの物語の中に何を感じるかは、もちろんあなたの自由です。それをあえて言葉にする必要もありません。そのために物語というものがあるのです。物語は人の心を映す自然の鏡のようなものなのです。[24]

この物語は、村上自身も述べるように、絵本というジャンルにおいては内容が難解である[25]。だからこそ理解し、二人の関係性について自分の中で答えを出そうと時間をかけて読むことで読者は自分の心や考え方について認識する。またこの作業を期間を空け複数回行うこ

[24] 村上　前掲書あとがき
[25] 同上

とで、自分自身の考え方の変化や成長についても認識することができる。これが村上の言う鏡としての物語の魅力である。

また、木と少年の「与える・与えられる」の関係性にも複数の捉え方が存在する。最も一般的な解釈の一つとして、母と子の関係が挙げられる。木が女性的に描かれていることや、主人公の少年がどれだけ成長しても木は主人公のことを「ぼく」や「ぼうや」などと呼び続けることからこの関係性は導かれる。だが、この他にも様々な関係性は考えられる。例えば、自然界と人間の関係性だ。この関係は木から枝や幹などといった恵みを受ける主人公を人間、それに反抗できない木を自然と捉えている。そして、その大切さに人間が気づく頃には互いに死に近い姿になっている。この関係性は別の言い方をすればギブアンドテイクの関係性ともいうことができる。

村上は『ノルウェイの森』や『海辺のカフカ』など数々の名作を生み出してきたが、この作品においては、翻訳者として大きく存在感を出した異質化の翻訳をした。ここには、魅力的な原作、そしてこの作品を生み出した作者に対する村上のリスペクトを非常に感じられる。村上自身も「テキストの文章の響きに耳を済ませれば、訳文のあり方というのは自然にきまってくる[26]」と発言していることから、作品と作者にリスペクトを持って「異質化」を行い、読者にこの物語の魅力を伝えようとしたのだ。

V　『おおきな木』の教育的価値

ここまで、本田と村上それぞれの翻訳の特徴について分析してきた。本章では、それらを

[26] 村上春樹・柴田元幸(2000)『翻訳夜話』文藝春秋 p.35

比較し、そこから考察をしていく。

本田は、小さい子供に読まれることを想定し、読みやすいようリズムを作るなどの工夫を多く施している。そして、読者に無償の愛について理解してもらうために、あえて木の心情に寄り添った受容的な翻訳をしていると考えられる。タイトルを『おおきな木』としたのも木の寛大な心から生まれる見返りを求めない無償の愛を日本人読者にもイメージしやすくするためだろう。

また村上は、子供に限らず様々な年代を対象に、より原作に近い形式で翻訳をすることで、幅広い読みなどといったこの物語そのものの魅力を伝えようとしている。一貫した表現を続けるなど、原作へのリスペクトを持って翻訳を行い、異質的な表現を通して読者に幅広い読みを委ねているのだ。これらの翻訳を通した読者へのメッセージの違いが、表現にも違いを生んだ。

子ども読者に配慮した翻訳を「受容化」、原文に敬意を持った翻訳を「異質化」としてきたが、これらを「声」という言葉を使って言い換えると、「子ども読者にも届く声で語ること」と「作品の声を聞くこと」となる。前者における声とは、読み聞かせを意識したものである。子ども読者は耳から言葉を聞き、字が読めない分絵をしっかり見て頭の中でイメージを膨らませる。そして登場人物に自己同一化させて作品世界に溶け込む。これに対して、後者の声とは、作者の意図に近いものである。作品内の登場人物に込められた作者の思いを、声として受け止め、受け取ったメッセージをそのまま書き写す。そして、作品を手に取った読者も作品からの声に耳を傾ける。

これらの点から、お互いに教育的価値を持ち合わせていると言える。前者の本田訳は読み

聞かせをすることで、子供の感性や想像力を育めるし、日本にはあまりない無償の愛という異文化を易しく取り込むことができる。後者の村上訳でも、「与える・与えられる」の関係について自分の中で複数のパターンを考えることで、想像力を広げることができる。この教育的価値こそ長い間、両者が幅広い世代から愛された理由だろう。

（8347 文字　原稿用紙 20.8 枚相当）

【参考文献及び関連 URL】

◆エーリッヒ・フロム(1991)『愛するということ』紀伊國屋書店

◆Shel Silverstein(1964)『The Giving Tree』Harper Collins

◆竹内美紀(2014)『石井桃子の翻訳はなぜ子どもをひきつけるのかー「声を訳す」文体の秘密ー』ミネルヴァ書房

◆藤本朝巳(2007)『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部

◆本田錦一郎(1976)『おおきな木』篠崎書林

◆村上春樹(2010)『おおきな木』あすなろ書房

◆村上春樹・柴田元幸(2000)『翻訳夜話』文藝春秋

◆Venuti, Lawrence(1995)『The Translator's Invisibility:A History of Translation』London: Routledge.

◆今井靖親、坊井純子(1994)『奈良教育大学紀要　人文・社会科学』第 43 巻第 1 号所収、奈良教育大学

◆小倉慶郎(2008)『言語と文化』第 7 巻所収、大阪府立大学総合教育研究機構

◆古市久子、西崎有多子(2009)『東邦学誌』第 38 巻第 1 号所収、愛知東邦大学